

環

(あい)

光耀抄	2
琥珀集	6
瑠璃集	15
瑪瑙集	28
紅玉集	31
3月号月評	32
惠贈句集拝見 (56)	34
惠贈俳誌拝見 (26)	36
特別作品「スイスアルプスの村を巡りて」…	38
「夫を看取る」	40
琥珀集作品鑑賞	42
瑠璃集作品鑑賞Ⅰ	43
瑠璃集作品鑑賞Ⅱ	44
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞	45
俳誌交歓	47
他誌転載	48
妣の国父の蒼天 (48)	50
京菓子資料館・京都御苑吟行記	52
ひこばえ通信 (20)	54

今月の一句

吊皮に背高く眠し春の風邪

桂樟蹊子

(昭和四十七年作)

師は長身であった。痩身であったから印象として長身のイメージは強いが、恐らく一七五センチ以上あったと思われる。その日、風邪薬を服用されてのご乗車だったのだろう、眠気をもようされた師は吊皮につかまりながら、人々の頭の上でうつらうつらとされたようである。芦屋の句会を終えると阪急電車で十三まで、いつも庇われながらご一緒だったことが懐かしく思い出される。

隆子

かぎろひ

塩路隆子

かぎろひの丘へと続く寒灯り
御狩場に潜む寒禽発つけはひ
笹酒を振舞はれつつ大焚火
白みゆく阿騎野に凍つる人麻呂碑
寒林に月傾きぬ阿騎の丘
阿騎野いま古代の茜寒の暁
かぎろひに傳かすけるかに冬の嶺

三月号光耀抄

塩路 隆子選

上皇の二三尺飛ぶ歌留多かな
荒海のまぶしき越や波の花
愛読書は宇宙凶鑑や初明
寒晴や滋味深みゆく干野菜
入日待つ珊瑚の海の浜ぬくし
菊炭の切口美しや初点前
煮凝の溶けて呪縛を解かれけり
魚鳥木封印されし屏風かな
火の神と風の神舞ふ大とんど
千年の景なる塔の初景色
寒水に晒す吉野の葛真白
枯蓮の池面にへの字くの字かな
ひとつづつ仕来り省き年用意
ペンションのロビーの暖炉あかあかと
氏神や破魔矢の鈴に杜の闇
腕振るふ婿の雑煮や三世代
燃え尽くし女人高野の冬紅葉

阪本 哲弘
坂上 香菜
鈴木 照子
松岡 和子
松田 和子
中村 ふう子
森下 康子
常田 創
塩路 五郎
橋本 靖子
藤見 佳楠子
中本 吉信
能勢 栄子
三川 美代子
宮田 香
森田 利和
山口キミコ

色のなき木地師街道山眠る

掌に幸を握りぬ実南天

欄干に白き鳥群れ寒日和

公家邸の池畔に凜と冬の鷺

ペットにも世辞を忘れず年始かな

風音に応ふるごとく落葉鳴る

狐火や近江に多きいくさ道

ボールペンを座右にひと日雪ごもり

「歩」とならむ妻が指図の年用意

金といふ漢字えらばれ年暮るる

陵の砂紋正しき淑気かな

初読や父の蔵書のセピア色

北風吹きて湯屋の暖簾の「ゆ」の揺らぎ

宇宙へと冬の漁火白光す

じんわりとこれもしあはせ冬至風呂

一献をすすめられをり雪女

初夢や白蛇に乗りて空翔くる

絢爛の王の住処や冬ぬくき

旬と旬のコラボの美味さ鱒大根

折鶴は空を恋ふるや雪の朝

池田加寿子

井口淳子

石川かおり

伊東和子

北尾章郎

大島みよし

小澤菜美

落合晃

笠井清佑

桂敦子

国包澄子

坂根宏子

笹井康夫

佐用圭子

杉本綾

竹内悦子

辻香秀

土井久美子

吉田宏之

田下宮子

霜柱踏みて大地の声を聞く
 料理本見つつチャーハン冬の暮
 葉牡丹の縮緬渦や小宇宙
 山裏は雪の降るらし比叡仰ぐ
 雪晴や湖面に映る逆さ富士
 峠茶屋薪ストーブに迎へられ
 早暁や身の芯までも霜の声
 大袈裟に鳴く嘎れ声寒鴉
 喜寿に向け黄金表紙の日記買ふ
 玻璃の空丹念に拭き年用意
 寒卵の手触り確と名産地
 ボンネットに畏まる猫年新た
 開戦忌記憶に残る朝の霜
 寝てなほ星降る余韻寒夜なる
 夕刊のクイズ親しや冬炬燵
 湯の宿の客をもてなす七日粥
 初夢や秘すれば願ひ叶ひける
 びんづるに帽子かぶせて寒の寺
 改装の東京駅舎冬レンガ
 簡素化に乗りたるもよし年用意

伊藤 和子
 高谷 栄一
 田中 浅子
 谷口 俊郎
 辻 知代子
 伊藤 純子
 大松 一枝
 福本 すみ子
 川崎 利子
 中井 登喜子
 中川 すみ子
 長濱 順子
 難波 篤直
 西岡 裕子
 西垣 順子
 西田 史郎
 西村 敏子
 秦 和子
 藤本 秀機
 前川 ユキ子

茅葺の村の素朴や野水仙
もがり笛又三郎を喜ばせ

障子閉づる縁に手造り糊の盆

児と競ふなぞなぞ付の新かるた

茜雲凜と聳えて初比叡

「紅白」に微睡む妻や去年今年

丈長き影法師ゆく冬至かな

パトカーの洗はれてゐる大晦日

絵馬掛けにハングルの文字初天神

弓構へ乙女きりりと成人日

白蛇の破魔矢を持ちて年をんな

咳の児の背中撫でやる夜更けかな

うたかたの夢と回れり紙の独楽

不揃ひの地蔵の道や初歩き

湯槽にて交はず挨拶初湯かな

注連張りし老杉の空鳶の笛

荒ぶ世の青き地球に年新た

鈍色の空に比良の嶺雪白く

魔女の住む柊リース古きドア

まぼろしの神の声聞く初詣

ノーベル賞受賞者へ降る雪の華

増田 一代

松田 洋子

山内 節子

山口 和子

山崎 里美

山本 孝夫

山本 丈夫

吉田 希望

和田 郁子

渡部 法子

和田 森早苗

粟倉 昌子

飯田 美千子

板倉 安正

伊庭 玲子

片岡 久美子

紀川 和子

木戸 宏子

小西 和子

小林 久子

関根 ひろみ

琥珀集

荒海

坂上 香菜

廓跡に一つ星なる雪の茶屋（ミシユラン）

荒海のまぶしき越や波の花

初春の大淀燦と明けゆけり

襖絵の阿吽の龍や年新た（泉涌寺）

白毫のひかる菩薩や春を待ち

銹朱色の暖簾に屋号日脚伸ぶ

和久傳の懐石締めは椿餅

吉書揚

阪本 哲弘

畳替昭和の紙面拾ひ読む

デカンショは一節のみや年迄

年用意妻の指揮下に入りけり

一束の書簡を整理去年今年

初日記八十路に入りて何書かむ

上皇の二三尺飛ぶ歌留多かな

捨てし句の舞ひ上がりたる吉書揚

大和離れず

鈴木 照子

愛読書は宇宙図鑑や初明

合気道の父子の気合や寒最中

ふるさとの大和離れずなづな粥

マヤ暦の終なるけふの柚子湯かな

「ダイヤモンド富士」が表紙絵初暦

白雪姫の魔女を熱演聖夜劇

新成人長髪高く盛り上げて

干野菜

よく笑ふ夫婦庭師や冬うらら
畑へと道行きめきし頬被り
冬麗や妣の文字ある味噌の甕
寒晴や滋味深みゆく干野菜
寒稽古泣いてばかりの豆剣士
訪ふ人に香り振舞ふゆずレシピ
初夢や「生きてゐるよ」と妣笑まふ

松岡 和子

沖繩旅行

パノラマの東支那海師走風
若人の琉球笛や日脚伸び
入日待つ珊瑚の浜の冬ぬくし
反基地の琉球王国年迫る
泡盛の良きのど越しや年忘
米兵の通ふステーキ年の暮れ
硝子戸に映るツリーや聖夜なる

松田 和子

冬の星

冬の星ひとつは宇宙ステーション
書き癖で解る賀状や恙無く
菊炭の切口美しや初点前
足元の棒のごときや底冷え
千両も万両も食ひ鴨騒ぐ
冬木の芽こぞりて天を仰ぎけり
俎を打つ音は妣七日粥

中村ふく子

西育ち

福袋最後列に蹠く不安
「君の名は」と聞かれ初夢覚めにけり
煮凝の溶けて呪縛を解かれけり
白味噌を好む雑煮や西育ち
洋風のお重が人気年明くる
まあまああ的人生なりし年酒酌む
元旦の母真白なる割烹着

森下 康子

鬼打ち豆

常田 創

魚鳥木封印されし屏風かな
鮫鱈を耀るあんかうの如き顔
生命のスタツカートや冬木立
海鼠噛むこめかみの音確かむる
白菜と白銀二枚交換す
水洩の男の子後生畏るべし
園長の威厳や鬼打ち豆喰らふ

大とんど

塩路 五郎

口遊ぶ七種粥や朝の卓
姫捲り喜ぶ児らの歌かるた
裸婦に似し干大根のオーラかな
初夢や「金」の大魚を釣り上ぐる
火の神と風の神舞ふ大とんど
寒雀大樹の影に寄り添へる
今年また箸紙に書く名の増えて

大極殿

橋本 靖子

初日受け大極殿の鴟尾燦と
風花を受け止めむとて駈け出す児
幸少しそれがなにより除夜の鐘
古梅園の梶煤色初日受く
南画めく五重の塔に粉雪霏々（興福寺・五重塔）
バツカスに囚はれぬやう年酒置く
千年の景なる塔の初景色（斑鳩の里）

日脚伸ぶ

藤見佳楠子

寒水に晒す吉野の葛真白
座頭鯨海盛り上げて大ジャンプ
冬眠の蛇も目覚めむビル工事
初謡声朗々と長寿眉
新雪の音なく積るをんな坂
抱く嬰の小さき欠伸日脚伸ぶ
閑けさの戻りし宮居笹子鳴く

初鏡

中本 吉信

冬夕焼

三川寿代子

微笑めば気分朗らに初鏡

枯蓮の池面にへの字くの字かな

遠き日のことは鮮明に返り花

松籟のさやに高鳴る淑気かな

寝入る母に読みつぎせがむ布団の児

救急車に遠吠え合はず寒夜かな

着ぶくれてペンギンの歩の短軀かな

逆光の櫛並木の冬夕焼

公園の子の影長き冬至かな

デザートに蜜一ぱいの冬林檎

日溜りにほっと安らぐ冬すみれ

ペンションのロビーの暖炉あかあかと

底冷えの弘法市や端布買ふ

寒風が磨く赤かぶ味自慢

冬の虹

能勢 栄子

破魔矢

宮田 香

諸雑炊戦時の母のあの姿

開戦忌児童集めていくさの世

冬の虹山に架かりて神々し

白菜の大株切りて子等を待つ

月を背に村人総出雪を掻く

ひとつづつ仕来り省き年用意

年明けて変らぬ独り暮しかな

氏神や破魔矢の鈴に杜の闇

初東風の地蔵に被せ赤頭巾

黄揚櫛に浸むる椿油初鏡

重話に母の野菜の色かたち

旋回の鳶の空より粉雪舞ふ

夕刻の窓辺に時報冬至の日

湖の青さを奪ふうった姫

瑠璃集

霜柱

霜柱踏みて大地の声を聞く
風花に枝切る音や老職人
葉の下にあと一息の冬芽かな
寒鰯を上等にしてふるさとへ
正月と誕生月を寿ほがれ

伊藤 和子

鰯大根

旬と旬のコラボの美味さ鰯大根
「大吉」を結ぶ晴着や初詣
久々の相場活況初日記
功もなく過もなきままに年暮るる
来ぬ賀状に思ひ巡らせひとり酒

吉田 宏之

雑煮椀

泣き黒子見せて滑空百合鷗
蹴りてみむ並木路に積む枯落葉
料理本見つつチャーハン冬の暮
一条の日矢に赤らむ淑気かな
白味噌に白餅二つ雑煮椀

高谷 栄一

初菫

折鶴は空を恋ふるや雪の朝
神坐す高千穂の山初菫
新藁の大蛇奉納島の宮
夫よりの労ひ受けて年酒酌む
羽子板の団十郎は見得を切る

田下 宮子

葉牡丹

祇王・祇女の玉眼妖し風冴ゆる
奥嵯峨の時雨に煙る小倉山
葉牡丹の縮緬渦や小宇宙
庭下駄に宿の屋号や雪の朝
冬麗のお伊勢参りや地のうどん

田中 浅子

三月号月評

塩路 隆子

上皇の二三尺飛ぶ歌留多かな

阪本 哲弘

近くでは近江神宮などで行われるいわゆる百人一首のかるた会の様子を見られての俳句である。面白いのは張り飛ばされての結果であろう上皇の札が、二三尺も飛んだと言う把握である。知っているのは後鳥羽上皇の「人もをし人もうらめしあぢきなく世を思ふゆゑにもの思ふ身は」であるが、承久の乱に敗れて隠岐に流され在島十八年で崩御された悲運の上皇だが、更に張り飛ばされている状況を詠んだだけの俳句であるが、それを見た作者の想いは連想として浮かび上がる。流石老練の作者ならではの立派な作品である。

荒海のまぶしき越や波の花

坂上 香菜

越前・加賀・能登・越中・越後・出羽などをひつくるめて越の国と呼ぶ。冬の日本海沿岸で強風にあおられて、岩場に砕け散る波が白い泡状になったものを波の花と言ひ、沿岸での冬の風物詩となっている。ほんの小規模の波の花の泡が風に吹き飛ばされている風景を見た記憶は

あるが感動するほどの規模ではなかった。作者はよい時期に訪問された。海は荒れているが眩しさを感じるほどの波の花を見られた作者の感動が伝わる。「まぶしき越や」がそれを表現している。良い作品である。

愛読書は宇宙図鑑や初明

鈴木 照子

お孫さんの面倒を毎日見ておられる作者である。俳句は一人称でないといけないが事情を知っている者にとつてはお孫さんの事とすぐわかる作品である。

その坊やが大の宇宙好きのようである。元旦早くから宇宙図鑑を広げておられる様子を詠まれた。末は宇宙飛行士を目指す坊やに成長されるかも…。頼もしい青年に育って戴きたい。「初明」が効いている。

入日待つ珊瑚の海の冬ぬくし

松田 和子

ご主人さまとよく旅をされる。沖縄での作品の連作の中の一句である。冬といっても20度以上の気温はあるはず。広々と広がった海を見て冬の珊瑚の浜で入日を待つなどは最高のいい気分でしょうね。心の温かさまでを感じる「冬ぬくし」の措辞である。関連の「若人の琉球笛」の句にも惹かれる。いい旅であったことを共に喜びたい。(以下略)